

2021年度 国内研修レポート
中世和歌文学研究——新古今時代と南北朝期を中心に——

文学部日本文学科 准教授
君嶋亜紀

1. はじめに

2021年度、東京大学大学院人文社会系研究科で行った国内研修について報告する。

東京大学大学院人文社会系研究科の日本文化研究専攻は、日本語日本文学専門分野と日本史学専門分野から成り、文学と歴史学を包摂した視座から中世の和歌について考究することができる。本研究は後述するように、中世という日本の歴史の転換期に成立した勅撰集の政治性に着目し、中世社会における和歌の機能を考察するものであり、本研究を進める場として最適である。今回の研修では、日本史学専門分野の授業を聴講させていただくことで、改めて歴史学の基礎的な研究方法を学び、最新の知見を得て、中世という時代の理解を深めたいと考えた。

2. 研修目的

日本の中世は、武士が台頭し戦乱や政変の相次いだ、動乱と分立の時代である。そのような時代に、平安王朝以来貴族文化の中心にあった和歌は、どのように受け継がれ、また変容していったのか、という問題意識から、筆者はこれまで、中世和歌の表現や歌集の構想を、古典主義と政治性に着目して分析してきた。これは天皇や都という古代以来の権威が変質した中世社会における和歌の機能を考察すること、そのうえで勅撰集を軸に、規範性と異端性という視点から中世和歌史の動態を描き出すことを目指すものである。そのために、古代から中世への転換点に成立した鎌倉時代初期の勅撰集『新古今和歌集』と、天皇と都の分立した南北朝期の争乱の中で生まれた南朝方の准勅撰集『新葉和歌集』という二つの転換期の作品を研究の柱に据え、近年はとくに後者の研究を進めてきた。

2014年12月には『新葉和歌集』の全所収歌に通釈・語釈・補注等を付した初の注釈書（深津睦夫氏との共著、明治書院・和歌文学大系の1冊）を刊行した。同時に、この注釈作業を進める過程で見出した課題を論文として発表してきた。南朝和歌は、戦前は皇国史観から「悲歌」と称揚され、戦後は一転して概ね等閑視された。しかし近年、歴史学の分野でも

後醍醐天皇を中心に建武政権と南朝の研究は進展しており、鎌倉・室町時代を取り上げた研究書や一般書が続々と刊行される中世史ブームともいえるべき状況と相俟って、南朝も戦前とは異なる観点から注目されている。筆者の研究もこうした状況と連動するもので、悲歌からも等閑視からも脱却し、停滞していた南朝和歌研究を進めた点で、また中世文学研究において南朝和歌の表現研究という新たな分野を切り拓いてきた点で、ある程度の成果を得られたと考えている。一方、前者の新古今時代については、現実社会の胎動と古典主義という表現姿勢との接点を探るべく、本歌取りを軸に論じてきた。さらに現在、中世和歌の研究者と共同で『新古今和歌集』の注釈作業を進めており、その過程で新たな論点も見出している。以上の二つの時代、二つの作品の研究成果を有機的に結びつけて、中世和歌史の動態を描き出していくことが次なる課題となっている。

以上より、これまで蓄積してきた新古今時代と南北朝期に関わる研究を総括して中世和歌史という文脈の中で再構築し、不足する部分を補って著書にまとめること、研究の基盤を固め、かつ広げるために歴史学の手法と知見を得ること、他分野の学びや人的交流を通して新たな研究の視座を獲得することがこの研修の目的であった。

3. 研修成果

はじめに聴講した授業や学会等について報告する。指導教員の高橋典幸准教授の授業「日本史学演習Ⅴ」〔通年（S・A セメスター）：4月～1月〕と、「古文書学特殊講義Ⅱ」〔前期（S セメスター）：4～7月〕を聴講した。前者は鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』を新訂増補国史大系をテキストとして読む演習形式の授業で、歴史史料の扱いや調査方法の基本を改めて学んだ。後者は古文書学概論で、古代から中世の古文書（上申文書）の様式と変遷について学んだ。さらに日本文学専門分野の木下華子准教授の大学院の授業「中世文学研究」にも参加させていただいた。南北朝時代の歴史物語『増鏡』の第二「新島守」（承久の乱と後鳥羽院の隠岐配流）を演習形式で読む授業で、大学院生の発表に大いに刺激を受けた。また学会等では、東京大学国語国文学会大会（4月）、中世文学会大会（5月、10月）、和歌文学会例会（7月、11月）、西行学会大会（9月）、東京大学中世文学研究会（9月、1月）、和歌文学会大会（9月）、全国大学国語国文学会大会（12月）をいずれもオンラインで聴講した。

前年に続き 2021 年度も新型コロナウイルスの感染拡大は収まらず、春～夏と冬には緊急事態宣言等も発令されて、図書館等の利用が制限された。上記の授業もすべてオンラインで受講した。当初想定していた各地への調査や、対面でのシンポジウム等への参加と人的交流

は断念せざるを得なかった。よって研修は基本的に、可能な限りでの図書館等での調査と在宅での研究を進める形となった。しかし、腰を落ち着けて考える十分な時間を得られたことは、下記(1)の著書の取り組みにつながり、この研修期間中の大きな成果となった。以下に研修成果の主なものを挙げる。

(1) 研究書の原稿執筆

2002年4月以降2021年3月まで、学術雑誌や論集に掲載された中世和歌に関する論文18本を再考して加筆・修正を施し、研修期間中に執筆した新稿を複数本加えて、研究書にまとめた。内容は新古今時代の和歌と南朝和歌の二篇から成り、これまでの筆者の研究を総括するものとなった。2022年5月現在、今年度中の刊行を目指して作業を進めている。

(2) 南朝和歌

近年、南朝和歌について南北朝期の他作品と比較しつつ相対化する試みを進めている。研修の前年度に刊行された拙稿「後醍醐天皇の面影——南北朝期の五撰集から——」(『大妻国文』第52号、2021年3月)では、北朝の勅撰集における後醍醐天皇像について考察した。これを受けて後醍醐享受という問題意識から、『増鏡』第十六「久米のさら山」の後醍醐天皇配流記事を取り上げ、記事の構成と和歌の機能について考察し論文にまとめた(「後醍醐天皇配流の道行と和歌——『増鏡』「久米のさら山」試論——」『大妻国文』第53号、2022年3月刊行)。また別に、『新葉和歌集』や同集撰者宗良親王の家集『李花和歌集』等、南朝和歌関係の文献資料の収集、調査を進めた。

(3) 新古今時代の和歌

上記2の『新古今和歌集』の注釈作業を進めた。また、(1)の著書では新古今歌人藤原良経の本歌取りについて考察している。これを受けて研修期間中に、旧稿「良経の菖蒲」(中世の文学『新古今増抄』七「月報」、三弥井書店、2017年)で取り上げた良経の本歌取り詠「うちしめり……」(後掲)を再考し、後代の京極派への影響について調査、考察を進めた。後者については、今年度中に論文にまとめて投稿する予定。よってここでは前者について、研修成果の一端として以下に報告する。

4. 藤原良経「うちしめり」詠について

上記の旧稿「良経の菖蒲」では、『新古今和歌集』¹⁾に収められた藤原良経の夏歌、

うちしめりあやめぞかをるほととぎす鳴くや五月の雨の夕暮 (夏・220)

を取り上げ、この歌を詠んだ建久6年(1195)2月²⁾、良経は7年前に早世した兄良通の死

を想起していた可能性があるのではないかと言及した。当該稿は月報掲載の小文であったため、改めて考えてみたい。

良経歌は『古今集』恋一卷頭の著名な恋歌「ほととぎす鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」を本歌とする。谷知子氏（2012）はこの本歌について、上句（序詞部分）の「ほととぎす」「鳴く」「さつき」「あやめ」という景物の取り合わせが『万葉集』に見出せる類型で、恋しい人の不在と結びつくこと、藤原定家の古今集注（『頭注密勘』密勘・『僻案抄』）では「あやめも知らぬ」の語句の由来を、夕暮の暗闇で事物の文目が見えなくなる状態と説明していること、八代集では同語の用例を4首見出せるが、すべて人の死を詠んだ哀傷歌であることを指摘して、『万葉集』と『古今集』に共通する「ほととぎす」「鳴く」「さつき」「あやめ」の語句を摂取した良経歌は、この取り合わせの持つ意味を取り込みつつ、本歌が有していた暗闇のイメージを理解したうえで「周囲を暗闇によって閉ざし、視界を奪っていく景物」である「雨」と「夕暮れ」を加えたものと論じている。良経がこの古今集歌を摂取した際、死や不在の文脈を連想した可能性があるということになる。

良経の2歳上の同母兄良通は文治4年（1188）2月20日、22歳で急逝した。同年成立した『千載集』には良通詠が4首残されている。なかに「軒近くけふしも来鳴くほととぎすねをやあやめにそへてふくらむ」（夏・170）という歌があり、菖蒲と時鳥の取り合わせが「うちしめり」詠と共通する。常套的ではあるが、良経詠ではこの取り合わせは当該歌のみ。毎年五月五日に用いるため、一年前と引き比べて故人の喪失を意識しやすい菖蒲も、冥土を往来する鳥とされる時鳥も、死と近しい景物でもある（以上は旧稿で述べた）。

良通と良経は父兼実の庇護の下、ともに詩歌を学んだ絆の強い兄弟であった³。良経も『千載集』に7首入集しているが、撰者藤原俊成は同集・恋三に兄弟の姿を刻むかのように二人の同じ題「称他人恋」の歌を並べている。良経の和歌活動は、漢詩を好んだ兄の没後に本格化していく。兄の死の翌年、叔父の慈円に贈った次の2首は『千載集』入集歌（文治4年4月以前）に続き、良経の歌で詠歌年次のわかる早い例である。

文治五年八月十五夜に、殿の大納言〔良経〕の御許より

こよひ君おなじ心に月を見ば宿のけしきを思ひ知れかし (5108)

「付如此令申候、往事被思出事多候」とて

とへかしな影を並べて昔見し人もなき夜の月はいかにと (5109)

故内府〔良通〕事思出て、かくは詠みたるなり（『拾玉集』第四・巻末部）

十五夜の月を見て慈円と心を通わせることを願う5108は、文治建久期の新風歌人たちがし

ばしば交わした月や雪をめぐる風雅の贈答を想起させる。実際この翌9月頃、慈円・寂蓮の贈答歌に良経が加わった早い例が指摘されている⁴。さらに「おなじ心に月を見ば」という自身の言葉に触発され、良通のいた「往時」を思い出して詠み添えた5109は、「影を並べて」月を見上げる年若い兄弟の仲睦まじいシルエットが浮かぶ歌で、二人の初学期を象徴する光景になっている。この歌は慈円の返歌「いにしへの影なき宿にすむ月は心をやりてとふと知らずや」（同集・5111）と併せ、良経も後年『秋篠月清集』に収めている⁵。

良通急逝の経緯は兼実の日記『玉葉』に詳しい。良通の病悩は文治4年2月8日に始まる。前後に奥州に逃れた源義経（良経と訓が通じるため義頭と改名）の追討記事が続き、良経にとっても印象深い時期であったと思われる。18日には良通が妻（藤原兼雅女）を伴って兼実を訪れ「所労此両三日復例」と告げたが、翌19日に事態は急変する。当日は兼実の父忠通の忌日で良通も法会に参列し、兼実と同車して（車中で兼実の誦す法華経を閑かに聞いていた）冷泉亭に帰り数刻雑談、兼実の来客中、良通は子刻（午前0時）に帰宅した。ところが小時の後、良通邸の女房が「周章走来」て良通が「絶入」と告げたので、兼実が「劇速」に駆けつけると、良通はすでに「身冷氣絶」という状態で、以降翌朝まで読経や加持を行う中、刻々と冷たくなっていく様子が記録されている。九条家の人々にとって忘れ難い一夜であったろう。良通の遺骸は22日夜に嵯峨辺の小堂に移され、28日に火葬。翌文治5年2月20日の良通正日の法会には良経も参列、同月30日には20歳の良通室が嵯峨堂で慈円を戒師として父に無断で出家した。良通は生来病弱であったというが（久保田淳1973）、兼実が「心操才漢・政理芸能・忠勤至孝」を兼ね備えた「撰籙之家嫡」（『玉葉』文治4年2月20日条）と期待した良通の死が九条家の人々に与えた衝撃が想像される。

この兄に代わって急遽20歳で家嫡となった良経の亡兄への思いは深い。『秋篠月清集』無常部冒頭の長い詞書には、良通が夢に現れたことが語られている。

前内相府幽霊、一辞東閣之月、永化北芒之煙以来、去^①文治第四之春、忽入我夢
以呈詩句、今^②建久第二之春、又入人夢開曉之詞、実知娑婆之善漸積、泉壤之眠
自驚者歟、爰依心棘之難仰、奉答夢草之幽思而已

見し夢の春の別れのかなしきは長きねぶりの覚むと聞くまで

（『秋篠月清集』無常・1564）

死去の直後の文治四年春（①）、良通が俄かに良経の夢に現れ詩句を呈した。『玉葉』同年3月9日条——兼実は良通死後「前後不覚」となり、2月20日から5月9日まで『玉葉』を断筆、数ヶ月後に人に尋ねたり思い出したりしてこの間の記事を記した——によると、その

夢は 10 日の良通三七日仏事の前日のことで、良通は「六韻之詩」を呈し唱和を求めたが、良経は目覚めて「春月羽林悲自秋」の一句のみ覚えていた⁶。さらに 3 年後、良通遠忌の前の建久 2 年（1191）2 月（②）にも良通が「人」の夢に現れた。『玉葉』同年 2 月 16 日条によれば「人」は文章博士業実で、良通は「嘆くなよ過ぎにし夢の春の花さめずはさとりひらかましやは」と詠歌し、これに良経が唱和したのが上記 1564 の歌である⁷。詞書は建久 2 年の「今」の時点で語られているが、『秋篠月清集』を自撰して、この歌を無常部冒頭に置き、前掲「とへかしな」詠を続けて並べた元久元年（1204）まで、良通の死は良経の心中に尾を引いていたと思われる。詞書が同集中でこのみ漢文で綴られることも、漢詩文をよくした良通の亡魂（「前内相府幽霊」）と対話しようとしているように見える。他に『秋篠月清集』哀傷部には、嵯峨の良通の墓所で慈円が詠んだ「懐旧」の歌と良経の返歌（年次不明、紅葉と時雨を詠む秋の歌）も収められている（1558・1559）。同集の哀傷部はこの良通哀傷歌 2 首と亡妻哀傷歌 4 首から成る小部立て、同部と無常部の冒頭に置かれた良通の存在は大きい。父兼実や叔父慈円より先に逝った良経の 38 年の生涯に直接哀傷する身内はそういない。むしろ 36 歳の時に自撰した家集に「哀傷」「無常」の部を立てたのは、兄と妻を早くに亡くしたからこそともいえようか。『玉葉』には上記の建久 2 年に続き、3 年、5 年の 2 月 20 日にも良通遠忌の記事が見える。2 月は忠通の遠忌もあり、九条家にとって死者を思う季節でもあった。前述のように「うちしめり」詠に詠み込まれた「ほととぎす」「鳴く」「さつき」「あやめ」という景物の取り合わせは、死や不在の文脈を喚起するとされる。建久 6 年 2 月に家の歌会でこの歌を詠出した時、良経は 7 年前の 2 月の兄の死を想起していた可能性もある、と想像してみたい。

なお、同じ建久 6 年 2 月の 29 日、良経は公卿勅使として伊勢神宮に発遣される大役を担った⁸。翌 3 月 12 日に行われる東大寺供養の祈願を目的とした発遣（『百鍊抄』）で、九条家として先例のない任務であり、過失なく完璧に遂行することで撰関家の能力を顕示すべく、兼実の指示を受けつつ周到に準備した。その準備をされていて、嫡男であった亡兄の存在を思うこともあったろう。良経の「伊勢公卿勅使別記」（『玉葉』建久 6 年 2 月 29 日条付載、記事は 12～23 日分／なお『玉葉』の同年 2 月の記事は 23・29 日のみで、20 日の良通忌日については不明）によれば、2 月 12 日に殿上の議定で発遣が決まり、良経は兼実から内々に告げられた。以降、17 日には春日社に参詣、20 日に内々の仰せがあり、23 日に召仰のため参内と準備に邁進したため、当該歌を詠んだ五首歌会は発遣決定以前の開催であったと思われるが、後年、たとえば『秋篠月清集』自撰時や『新古今集』撰集作業時の良経は、自身

がかつて詠んだ「うちしめり」詠を見て、改めて公卿勅使の大任や兄の不在を想起したのではないか、とも想像してみる。

題詠の解釈に作者の実人生を取り込むことには慎重であるべきだろう。旧稿でも述べたように、この歌は初句にまず「うちしめり」と皮膚感覚を提示する表現に新しさがある。享受者を詠歌主体の視点に引き込むこの初句から、しっとりとした湿った大気、軒先から室内に漂う菖蒲の香、時鳥の鳴き声、五月雨の音、夕闇に閉ざされていく視界——と触覚、嗅覚、聴覚、視覚を融合させた情景が展開し、またそのようにして外界の情景を感受する人物の姿が浮かんでくる。同時に、三・四句「ほととぎす鳴くや五月の」で恋歌である本歌の初二句と接続することで、恋の思いが手繰り寄せられ、薄暮の室内に居るこの人物が恋心を抱えているようにもみえてくる。感覚の融合が詠み込まれ、本歌取りによって恋の気分の漂う四季歌になっている点で、新古今時代の特徴的な歌風を備えた一首として完結している。

しかしまた、作者良経の詠歌時の境遇を考えると、本稿で述べたような解釈の成り立つ余地もあるのではないか。菖蒲の香、時鳥の声、雨音に包まれ視界の閉ざされた空間は、幽明境を異にする死者と交感するのにふさわしい。この歌の夕闇には死者——亡兄良通の面影も沈んでいるのではないだろうか。

5. おわりに

今回の研修は、コロナ禍の影響で当初予定していたものとは異なる形となったが、筆者にとってこれまでの研究をまとめ、新たな視角を見出す貴重な時間となった。ここで得た知見を今後の研究と中世和歌文学を扱う授業に生かしていきたい。例年以上に業務繁多で先の見えない状況の続く中、予定通り、国内研修の機会を与えてくださった大妻女子大学と、快く送り出してくださった同僚の先生方に心より御礼申し上げます。

研修先：東京大学大学院人文社会系研究科

研修期間：2021年4月1日～2022年3月31日

指導教授：高橋典幸

参考文献

『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』文学篇4・勅撰集4（臨川書店、2000年）

図書寮叢刊『九条家本玉葉』十一・十二・十三・十四（宮内庁書陵部、2007－2013年）

- 和歌文学大系『長秋詠藻／俊忠集』(川村晃生・久保田淳、明治書院、1998年)
- 和歌文学大系『拾玉集』上・下(石川一・山本一、明治書院、2008—2011年)
- 和歌文学大系『秋篠月清集／明恵上人歌集』(谷知子・平野多恵、明治書院、2013年)
- 久保田淳『新古今歌人の研究』(東京大学出版会、1973年)
- 片山享『校本秋篠月清集とその研究』(笠間書院、1976年)
- 『藤平春男著作集』第1巻「新古今歌風の形成」(笠間書院、1997年)
- 谷知子『中世和歌とその時代』(笠間書院、2004年)
- 谷知子「序詞から本歌取りへ——和歌における共同体——」(『古代文学』51、2012年3月)
- 呉座勇一編『南朝研究の最前線』(洋泉社、2016年)

【4. 藤原良経「うちしめり」詠について：注】

- 1 以下、歌集名の「和歌」は省略する。本文の引用は、『新古今集』は伝為相筆本に、『秋篠月清集』『拾玉集』『長秋詠藻』は和歌文学大系に、他の歌集および歌番号は新編国歌大観による。
- 2 この歌は良経の家集『秋篠月清集』(1077)の詞書に「五首の題の中、夏の心を」とあり、建久6年(1195)2月良経家五首歌会の詠と推定される。この歌会については、森本元子『私家集の研究』(明治書院、1966年)332頁～、田渕句美子『新古今集 後鳥羽院と定家の時代』(角川選書、2010年)22頁～、和歌文学大系『秋篠月清集／明恵上人歌集』(→参考文献)等参照。『拾玉集』『拾遺愚草』によれば、題は春夏秋冬恋。『秋篠月清集』には同じ折の歌が他に2首(春部・1046、恋部・1424)見える。
- 3 『玉葉』によると二人の詩作の初見記事は良通15歳、良経13歳の養和元年(1181)9月7日、同年10月17日には良経の和歌の初見記事「今夜侍従〔良経〕方庚申之次、有連句和歌等事」もある。以下、良経の初学期については、久保田淳(1973)第三篇第一章第四節「後京極良経の少年時代——兄良通との関わりにおいて——」、片山享(1976)研究篇V「藤原良経詠歌年次考」、『藤平春男著作集』第一巻(1997)第一章II「建久期の歌壇と新古今への道」参照。
- 4 谷知子(2004)第二章第四節「良経の「隠遁」志向」(初出=1991年6月)、櫻田芳子「文治五年秋、良経・慈円・寂蓮の贈答歌について」(白百合女子大学言語・文学研究センター『言語・文学研究論集』4、2004年3月)。
- 5 『秋篠月清集』秋部1203・1204、詞書「内大臣の事侍けるころ、無動寺法印のもとへつかはしける」、1203の第四句「人なき夜半の」。また同集・無常部1565(第四句は拾玉集と同)・1566にも重複して収められている。この2首は後に良経詠の第四句「人なき夜半の」の形で『新続古今集』哀傷・1571、1572に所収。なお、初句に「とへかしな」と置き「……はいかにと」と結ぶ唯一の先例として、『長秋詠草』に兼実の歌「とへかしな世の墨染はかはれども我のみ深き色はいかにと」(590)を見出せる。皇嘉門院(藤原聖子。忠通女、兼実の姉で兼実を猶子とした。養和元年(1181)12月5日没)の没後、兼実が前年に同じく姉を亡くして服喪していた俊成に贈った歌である。同集ではその前に良通の死に関わる慈円と俊成のやりとりが並んでいる(586～589)。
- 6 『古今著聞集』卷十三・哀傷「後京極良経、夢に冷泉内大臣良通と逢ひ、六韻の詩を和する事」は、良経の唱和した六韻の詩の二句「再会夢中談往事 遺文詞上識春愁」を掲げ

る（『玉葉』に見えず、出典未詳）。引用は新潮日本古典集成による。

⁷ 以上、1564 詞書の解釈は片山享（1976）、和歌文学大系『秋篠月清集』参照。

⁸ 以下、良経の伊勢公卿勅使については、大岡賢典「後京極良経再考——定家との伊勢行の詠をてがかりに」（『国文学』42-13、1997年11月）、谷知子（2004）第一章第八節「建久六年伊勢公卿勅使について——九条家と東大寺供養——」（初出=1999年8月）参照。